

# 口腔の役割

## ひな祭り

平安時代、貴族の子供たちが紙の人形でおまごをする「ひいな遊び」がその起源と言われる「ひな祭り」。庶民の間に広がり、3月3日の桃の節句におひな様が飾られるようになったのは江戸時代になってからだそうです。江戸時代は1600年のはじめから1867年まで約270年にわたる長い時代です。

この時代にはいろいろな種類のおひな様が作られ、特に寛永(1624~1643)、元禄(1688~1703)、享保(1716~1735)に栄えたとされています。



寛永雛



元禄雛



享保雛

江戸時代の最初の頃に作られたひな人形に「寛永雛(かんえいびな)」があります。小さなおひな様で女びなは両手を開いた姿で、手先をつけず、着ている衣服も着物に袴(はかま)で古いかっこうをしています。「寛永雛」に続いて古いおひな様が「元禄雛(げんろくびな)」です。「寛永雛」よりひとまわり大きく、女びなは両手先がつき、着ている衣服は十二単(じゅうにひとえ)風になっています。この「寛永雛」や「元禄雛」が飾られた江戸時代前期から中期のはじめ頃までは、ひな飾りも1段か2段の低い台にひな屏風(びょうぶ)を立て、1組か2組のおひな様を飾る質素なものでした。その後、「享保雛(きょうほびな)」が流行し、大型のおひな様が作られるようになります。江戸時代後期になると財力のある商人達は競い合うように上方(かみがた)では豪華な御殿のひな飾りが作られ、江戸では7、8段におよぶ段飾り行われるようになったとされます。

ところでこのおひな様、時代とともに顔の特徴が丸顔から次第に面長(おもなが)に変化するのがわかります(岡崎好秀、1996)。元禄時代は食文化が大きく変化した時代と言われ、一般庶民の間でも、1日2回だった食事も3回になり、砂糖がまんじゅうとして庶民の口に入りだしたのもこの頃です。また玄米に変わり、軟らかい精製米を食べるようになったのもこの時代と言われます。顎の形は両親からの遺伝ばかりでなく、生まれてからの食生活によって大きくかわります。頭や上顎(じょうがく)の骨は遺伝の影響を受けますが、手足や下顎(かがく)などの、筋肉を使い、動かすことのできる長管骨(ちょうかんこつ)と呼ばれる骨は環境によって大きく変化します。虫歯で噛めない、軟食化で噛むことが少なくなると下顎骨でも同じことが起こります。つまり下顎骨の形は食べ物の形や硬さ、よく噛んでいるかどうかによっても大きく左右されます。

江戸時代末期、面長と言えば、第十四代将軍、徳川家茂(いえもち)が思い浮かびます。家茂は大の甘党で、保存されている頭蓋骨には31本中、30本の歯に虫歯があり、精米によりビタミンB1を含む胚芽が除かれた軟らかい白米を好んで食べていたことから脚気(かっけ)を患い、若くして亡くなったと言われますが、いずれも当時の代表的な生活習慣病に違いありません。

その時代の生活習慣が、人形の顔の特徴としてあらわれるのは、とても興味深いことです。ぜひそのような目でひな人形を見てみては。きっと何か新しい発見があるかもしれません。



江戸幕府第十四代将軍  
徳川家茂 (1846~1866)

【参考】京都国立博物館 <http://www.kyohaku.go.jp/index.html>  
岡崎好秀 なるほどザ保健指導 クインテッセンス出版 1996

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】

